

■特定課題セッションⅢの報告

「変わりゆく世界において国際ソーシャルワーク研究が目指すものとは」

コーディネーター：松尾加奈（淑徳大学アジア国際社会福祉研究所）

2023年10月15日午前9時半より開催された特定課題セッションⅢは、20名以上の「国際」に関心を寄せる大会参加者が集まった。本セッションは、コーディネーターが所属する淑徳大学アジア国際社会福祉研究所が毎年開催している国際学術フォーラムや、ルーテル学院大学の原島博先生、日本女子大学名誉教授秋元樹先生を中心に実施しているアジア国際社会福祉研究会によって実施したヒアリング調査から着想を得て共同企画したものである（アジア国際社会福祉研究会, 2023）。「変わりゆく世界」というタイトルと着眼点については、関連書籍（e.g., 松田他, 2010）から着想を得た。なお、本報告の「社会福祉」と「ソーシャルワーク」については、発表者の意図に沿って使っている。社会そのものが越境化、国際化、多様化している中で、社会福祉の在り方が問われている。前日に開催された大会校企画シンポジウム「SDGsにおける人権問題への検証と社会福祉学の挑戦」で、日本の社会福祉が見落とし、見過ごしてきた課題について厳しい指摘があった。シンポジウムは、図らずも我々のセッションに通底する内容であった。

セッション登壇者は、報告順に、佐々木綾子氏（千葉大学大学）、稲葉美由紀氏（九州大学）・杉野寿子氏（福岡県立大学）・西垣千春氏（神戸学院大学）、そして添田正揮氏（日本福祉大学）である。3名の報告を受けて、会場参加者から様々な意見と活発な討議が行われた。日本の社会福祉学研究において、領域としての「国際」への関心は決して高いとは言えない。第71回秋季大会において国際社会福祉の分科会が開かれなかったことが良い例である。しかし会場に集まった参加者からは、「国際」を社会福祉専門職養成教育へ紐づけ、専門職としての基礎である、反抑圧の視点、人権とアドボカシー、エンパワメントの意味、ソーシャルアクションの学びに国際ソーシャルワークが貢献する可能性に言及する発言が相次いだ。もともと国際関係に関心のあった参加者や、日本国内のソーシャルアクションに関心をもち、国境を越えて活動することによって社会福祉士養成教育への視野が広がった参加者、多様性を尊重するという「学びの方法」の重要性を指摘する参加者、開発学に社会福祉（ソーシャルワーク）を位置づけたいと語る参加者もいた。

3名の報告者とフロアとの熱い共同討議は、参加者全員に知的興奮を残した。セッション参加者たちと、次期大会では国際社会福祉分科会が再び成立できるようにと、そして日本国内社会福祉学界で国際の議論の盛り上がり願って、正午に終了した。終了してもなお、会場では熱い議論や意見の交換がなされていた。コロナ禍を経て対面開催が復活した今期大会の特徴であったといえる。セッションに応募してくださった会員の皆さま、登壇者の皆さま、そして運営者である武蔵野大学と日本社会福祉学会事務局の皆さまに深く御礼申し上げます。変わっていく世界において、次世代を担う社会福祉専門職を養成する教育と、その教育を支える日本社会福祉学会に変化をもたらす機会の一助にこのセッションがなれたなら本懐である。

アジア国際社会福祉研究会. (2023). *調査報告書国際ソーシャルワークを実践家の声から問う*.

松田正己ほか(編) (2010). 「変わりゆく世界と21世紀の地域健康づくり 第3版」やどかり出版.